
華咲く頃

軀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

華咲く頃

【ZPDF】

Z6539D

【作者名】

転

【あらすじ】

過去に戻ることができたら、どんなに幸せだろうか…。

プロローグ

過去を想う者

未来を追う者

今を生きる者

その3人が全て揃つた時

3人の心にどんな変化が訪れるのか

：

第1話・かぐや

古代から境安、完内……やがれまな時をこえて、変化を続けてきた物語がある。

その中の一つに、「かぐやのひめわが」。

竹取物語に類似した、ある貴族の少女の物語。

今から書き綴るのは、境安よりももとと、古代の日本国で語られた

「かぐやのひめわが」。

そこは、ある城下町。

誰も中を見たことがなく、神様が住んでいたとされたお城の近く。

そんな場所に、農家と、それから竹やぶがある。

今日もあの人は、やつてくる……。

優しい、の人。

顔も名前も知らないけれど、きっと若くて純粋な男の子。

ほら、今日もやつてきた。

「この竹、やつぱり他と違つ氣がするな。」

そう言つて、誰も氣づかない私の存在に、今日も氣づいてくれるんだ。

「中身も気になるし、あれ…？中から音がするような…。」

『コツ、コツ、コツ、コツ…』

小さな爪のような音。

他の人だと怖がって、あわてて逃げていってしまう、この爪音。

『コツ、コツ、コツ、コツ…』

「…中に誰かいるのかい？」

『コツ、コツコツ、コツ…』

あ、リズムが少し、乱れた。

『コツコツコツ、コツコ…』

ギーゴーギーゴ…。

…？今のは、竹を切る音かなあ？

足元を見ると、銀色の刃が覗いているのが見えた。

スペツ。

今のは竹を切り落とす音。

2人の目が合ひ。

やつと会えた。

「やつと会えたね」

2人は笑う。

やつぱり君は、若くてきっと純粋な、そんな男の子。

自分よりかなり小さな私を抱いて、あのお城へ向かっていく。

そう、私はあのお城の、誰も知らないお姫様。

かぐやのひめさまなのです。

第2話・動き、発す。

「もつ時は、完内なのね…」

そう呟くのは、中学生くらいだろうか。
セーラー服を着た、小柄な少女。透き通る様な緑色の目は、ビック
遠くを見つめている。

「母さま、今も貴女は、黄泉の国より私を見守つてくれている
のでしょうか？」

その少女の母親は、きっともう他界しているのだろう。
若くして母親を亡くす。何とも残酷な話だ。

「父やまも、おばあやまも…みんな、みんな…」

少女は涙を流さない。

この都会、人混みの中で涙を流すことなど許されない。
そう思つて、いるようにも見えた。プライドが傷ついて、とも思つて
いるのだろうか。

『君、大丈夫？』

1人の少年が、声をかけた。

「顔色悪いよ？病院に行つた方が…「私の肌が白いのは元々だ。」

少年の心配をよそに、少女は話しあす。

「あれからもう、幾千の時が経つただろうか。心も身体も白くべぐもり、年もとらぬまま、私は何処へ歩を進めれば良いのだろうか。」

「君、何を言つて……？」

少年が問いかける。

「お前、何か困つてることはないか？」

「……は？」

「例えば、そう……愛しい人が、何年も前から帰つて来ない、とか。」

確かに、恋とは違うかも知れないが、僕には昔から仲の良い『久瀬ユウキ』という少女が居た。

しかし、僕に一言残したまま、どこかへ姿を消してしまったのだ。彼女が言つているのは、その事なのだろうか。もしそうだとしたら、何故その事を知つているのだろうか。一体、この子は……？

「私の名はナナミサチ。」

聞いてもいないうちに、彼女は自分の名を名乗りはじめた。

「お前の名は？」

「織田、瑞樹だけど……」

何故か反射的に、まだ名前しか知らない少女に、名を名乗つてしま

つた。

「ハバキ、お前は今、私と同じような状況にある。」

「…？」

「お前ももつ、氣づいているのだね？」

数年前かた、自分の成長が逆再生されはじめているのを。私もそれと同じようなものだ。数十年前、境安時代より、成長が止まってしまっている。

つまり、『不老不死』といつことだな。」

その通りだった。

僕が26歳の時からずっと、僕の成長は逆再生され続けている。今はもう、過去1番嫌な時を過ごした、17歳という年齢になってしまっていた。

「お前は、この現象が起つていてる理由を知つていてるか？」

「いや、知らないけど…何となく、思つていることない。」

「何だ？」

「うーん…でも、本当に何となく、だから…」

「いいから言え…」

彼女の…サチに表情の変化が訪れるのを、僕ははじめて見た。

「あ、うん。分かったよ。

僕には、幼なじみがいたんだ。それもさつき君に質問された「何年も前から帰つてこない」女の子。ユウキとは、小さい頃からずっと一緒にいて、すぐく仲が良かつたんだ。

だけど、僕は明るくて人気者のユウキとは違つて、地味で弱気な、いじめられやすい性格だつたんだ。まあそれは、今でも変わつていなんだけどね、ははっ。」

僕が話しながら苦笑しようと、サチの表情は一切変わらず、ただ僕の話を真剣に聞いていた。
それに応えようと、僕も真剣に話をはじめる。

「そのこともあって、僕は小学校高学年にあがつた頃から、ずっといじめられていた。それは中学校、高校も一緒で、ユウキはそれでもいつも僕と一緒にいてくれた。

だけど、責任を感じたのか知らないけれど、17歳の時、ユウキは突然僕の前から姿を消してしまつたんだ。

『瑞樹、ごめんね…瑞樹ツ』

僕の胸に飛び込んできて、そう行つたかと思うと、ユウキは走つてどこかに行つてしまつたんだ。

それから、もう僕の前にユウキの姿が現れることは、2度となくなつた。

ユウキが居なくなつてからも、僕のいじめは続いた。

今度は本当に友達がいなくなつて、僕はいつも1人だつた。大学に進学してもいじめは続いて…そこでも僕は、耐え続けた。耐えたというよりも、慣れた、というのが正しいかな？

もう僕にとって、『いじめ』は生活の一部のようなものになつてい

たしね。

そうやつて大学も無事に卒業して、普通の会社に就職したんだけど、そこでもいじめは続いた。

社会人になってまでもこんなことをする人がいるのかと、僕はすぐガッカリしたよ。

だけどそんな事を思つたつて、いじめが止まるわけでもなかつたら、僕は仕事をこなしつつ、いじめも受け続けた。

そして就職してから2年後、26歳の時。

成長が逆再生する現象が起つたのはじめたんだ。

成長が逆再生するのは不定期で、いつの間にか身長が縮んでいたり、顔が幼くなつたり…。

それで、今に至る、というわけなんだ。」

こんなに長く喋つたのは、久しぶりだつた。
ユウキがいなくなつてから、僕には家族以外、話す相手もいなかつたから。

「…なるほど。大体のことは分かつた。」

「それで、僕が言いたいのは『『ユウキ』という女と、今お前に起こつてゐる『成長逆再生』の現象、その2つに繋がりがあるかもしない、ということだらう?』

「うん…」

「そのユウキという女に、兄弟はいたか?」

「いや、多分居なかつたと思うけど…」

「それは、本当か？」

「う、うん、多分。」

サチはしじまひく考えてから、じつはいた。

「ハズキ、私にきて来い。」

「は？」

「ハウキといつ女を、捜してくべ。」

「あ、探しにこへつて言つたつて… 一体ビハムツもつ…？」

「それは、分からなー」

「じゅあびつやつて…」

「ただ、あちらの方向にこるとこひ」とだけは、分かる。」

そう言つてサチは、北の方向を指差した。

サチは、何も言わずに歩きだす。

それにつられてのひにひつて、僕も歩き出す。

コウキは見つかるのだろうか。

そして僕の成長逆再生は止まるのだろうか。

そして、ナナミサチは、一体どのような少女なのだろうか。

動き、
発す。

第3話・お国のおはなし。

むかしむかしあるところに、貴族のお屋敷がありました。

そこには優しい女の人と、少し厳しいおばあちゃんと、それからお国のお様がいらっしゃいました。

ある日、女の人とお様の間に、可愛い小さな女の子が生まれました。名を「幸」といいます。

や前の通り、幸は幸せに、明るく元気な子に育っていました。

しかし、そんな平和な日常も束の間。

ある年の冬、幸のお母さんも、幸のお父さんも、幸のおばあちゃんも。

みんなみんな、死んでしまいました。

お母さんは病氣で。

おばあちゃんは老衰。

お父さんは自害なさいました。

幸のまわりには、つかいの男以外、誰も、誰も、いなくなってしまいました。

やがてその男も亡くなり、幸は本当に独りぼつち。

もつ笑うこともできない。
話すこともできない。

とうとう幸は、何もできなくなつてしましました。

ただ毎日、生きていくだけ。

不思議と、何も食べなくても生きていけるようになりました。

そして、まだ幼かつた幸には、みんなの死がそれほどショックだつたのか、成長もしなくなつてしましました。

背も伸びない。

太らない。

大人になれない。

それからずーっと、火事でお屋敷が無くなつても、お国が戦争でボロボロになつても。

幸は生き続けました。

やがて平和になり、街には灯りも増え、身につける服までも変化をしていきました。

人の顔も、変わりました。
優しい人が、減りました。

けれど、たつた1人だけ、心優しい少年がいました。
その人は、昔幸につかえていた男に、すごくよく似ていました。

不幸だけど、いつも笑つてて。
お人よしで。

幸はその人と、お友達になりたいと思いました。

だから一緒に、旅に出ました。

遠い遠い、あのお屋敷を目指して。

第4話・声。

「・・・瑞樹・・・」

サチといつ名の少女の後をついていく僕の耳に、どこか聞き覚えのある、甲高い声が聞こえた。

「瑞樹・・・・・」

自分の名前を、必死に呟きぱれているような気がした。

「瑞樹、瑞樹・・・・・」

やつぱりそうだ。

これは、この声は。

「ユウ・・・キ?」

「どこが遠くから聞いたかの声に僕は手を伸ばした。

「瑞樹・・・」

「ユウキ・・・」

僕の名前を叫んでいるのは、何年か前まで、毎日一緒に過ごしてきました、唯一の友達、久瀬ユウキだった。

今、僕とサチが探している、金髪の、明るく活発な少女。

「瑞樹、今、助けてあげるから・・・」めんね、瑞樹、ごめん・・・

「

あの時と同じ台詞が、また聞こえる。

「コウキー。コウキ、謝らなくていい、もう、謝らなくていいから、はやく戻ってきてくれよ……」

その時気が付いた。

僕は完全に、弱っていた。
コウキのいない生活が続き、不思議な少女に出会い、何も食べず……

・そうだ。

サチと出会いてからもう、3日が過ぎる。

僕は今きっと、幻聴を聞いているんだ。

「瑞樹……？」

「だけど」の声は、やまびこ……。

「ミズキ。」

透き通るような声がした。

前を向くと、サチが立っていた。

「何をしてるんだ？ 行くぞ。」

無口な少女は、それだけを言い、また歩き出した。

僕もついていったが、それ以降、コウキの声が聞こえたことはなかった。

第5話・導

そこには、真っ白な雪が広がっていた。

そしてその奥には、大きな洞穴とも、トンネルとも言えるであつて、穴があつた。

僕とサチが、ユウキを探し出す為に動きはじめてから、もう半年が経つていた。

そして不思議と、僕はまだ、サチと出会った頃の高校2年生の姿のままでいた。

僕はひどく疲れていた。

サチは必要がないからと、食事はおろか、睡眠すらめったにどうせてももらえないのだ。

それでも、サチはどんどん進んでいく。

時に僕を気にしながら、穴へ消えていった。

僕もあとに続く。すると、半年前に聞いたものと同じ、ユウキの声

が聞こえてきた。

「瑞樹？」

「ユウ…キ…？」

「瑞樹ッ！来ちゃ駄目！」

疲れている所為だらうか。

僕は、そんなことはおかまいなしに、ただサチのいる方向へ、足を伸ばす。

「瑞樹！？瑞樹つてばー！」

雪に足を踏みつけて、穴に近づく。
穴に、入る。

瞬間、僕の身体が縮んだ気がした。

また一步、歩く。

また、僕の身体が縮んだ気がした。

一步、また一步。

歩くたびに、僕の身体は縮んでいく。
前方に、サチの姿が見えた。

気付くと、コウキの声は聞こえなくなっていた。

「ミズ…キ？」

サチの声は、僕の頭上から聞こえた。

「ミズキ…どうしたんだ？その姿は。」

サチに言われ、やつと気付いた。

『成長逆再生』

が、行われている。

しかし僕は、そんなことさえもおかまいなしに、ブレザーを引かず

り、小さすぎる身体で歩き続ける。

サチも仕方なしに、ついてくる。

半ば、心の中で心配をしながら。

ズリズリ、ズリズリ…ブレザーの引きずる音がうつるセー。

それでも、黙々と進む。

光が、見えてきた。

出口かと思った。

だけどそこには。

ヒローグ

神様、

私たちの思い出は

一体何処へ
?:

完。

続
きは、
2009年公開予定、
ボイスドラマにて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6539d/>

華咲く頃

2011年10月4日19時43分発行